

通俗伊蘇普物語

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
文 學 部		
英文文學部		
小 說		
目		
全 冊ノ内第		
分類 番號	第	號
256.25		
933.		

T 1A1

22

W 46

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 2 3 4 7 a

福岡教育大学蔵書



伊蘇普物語卷之二目錄

- | | |
|-----|---|
| 第四六 | 驢馬 <small>ろば</small> と狒狗 <small>ひろう</small> の話 (60) |
| 第四七 | 狼と羊の話 (63) |
| 第四八 | 獅子 <small>しし</small> 、奉公 <small>ほうこう</small> と狐 <small>きつね</small> の話 (64) |
| 第四九 | 歳徳神 <small>としとくがみ</small> と駱駝 <small>らくだ</small> の話 (65) |
| 第五十 | 驢馬 <small>ろば</small> と蛇 <small>へび</small> の話 (66) |
| 第五一 | ヘルキ <small>ヘルキ</small> と權現 <small>ごんげん</small> と車引 <small>くるまひき</small> の話 (67) |
| 第五二 | 兔 <small>うさぎ</small> と蛙 <small>かえる</small> の話 (70) |
| 第五三 | 農夫 <small>いんぷ</small> と鶴 <small>つる</small> の話 (71) |

第一枚

同 五 同 三 同 二 同

第五四	釣師と小魚の話 (72)	六
第五五	猿と洛蛇の話 (73)	同
第五六	北獅子の話 (75)	七
第五七	薪の束の話 (76)	同
第五八	武夫と獅子の話 (77)	八
第五九	乳母と狼の話 (78)	同
第六十	猿と海豚の話 (79)	十
第六一	犬小嚙と狼の話 (81)	同
第六二	燕と鶉の話 (86)	十一

第六三	燈火の話 (87)	同
第六四	牧人と家牛の話 (88)	十二
第六五	橡櫛と蘆の話 (91)	十三
第六六	水星明神と樵夫の話 (93)	十四
第六七	鶴と雁の話 (94)	十五
第六八	獅子と他の獣と狩ふ話 (95)	同
第六九	蚊と牛の話 (98)	十六
第七十	神佛天上小會合の話 (99)	同
第七一	日輪の妻迎の話 (100)	十七

第七二 盗人あしどろと母の活 (101)

十七

第七三 猫と虎の活 (102)

十九

第七四 獅子王と相対さうたい獣の活 (103)

二十

第七五 一いつ双さうの壺るの活 (106)

二二

第七六 醫者いしやと病人の活 (107)

同

第七七 衆しゆ虎こ商しやう機きの活 (108)

二三

第七八 獅子と野羊やぎの活 (109)

同

第七九 鷲しゆ黄金おうごんの卵たまごを産うむ活 (110)

二三

第八十 餐ちん餐さん小招せううれと大の活 (112)

同

第八一 蛙かえるの主人しゆじんを求もとむ活 (115)

二五

第八二 驢馬ろばと主人の活 (116)

二六

伊蘇普物語卷之二目錄終

伊蘇普物語卷之二

無盡藏書齋主人釋述

第四十六 驢馬と狒狗の活 (60)

或人狒狗と驢馬とを畜つ。驢馬をも速く厩つ。飼ふ豆や草を以て。狒狗をも近く左右おほく。飼ふ膏味を以て。肉ふれてを膝へ上げ。愛玩する。其。驢馬常お思ひく。狒狗を毎日遊び我と。且那に於てこの様。まふ。吾を。用む。り多くて。豆を木を牽く。本を車と也。骨の折る。り。狒狗の。樂で。の。を。や。あ。り。也。狒狗と。同。然。且那に。

おれけり。彼も同様ふ可憐づき。だらう。或日絆とて切て
中食の上へ喰ふ。爬たり。踏たり。妙なる容態で狂ひ。果々主人の飯を
喰て居る。又一跳込む。食机を倒す。汁を覆す。血小鉢を踏む。それ。
驢馬をさぐり。園小来。主人へ抱付尾を掉て。口をあん。た。
く。の。恰好。お。男。も。証。付。て。来。て。ス。ハ。旦那の一大。り。と。
ま。く。棒。を。う。ひ。ら。う。主。人。を。救。い。逆。を。お。倒。し。ま。し。ま。う。
それ。驢馬を頻々小歇息して。吾を。さ。あ。ぜ。自。己。の。本。分。を。守。ら。う。
う。な。ら。う。呆。狗。の。真。似。と。て。と。ん。だ。め。逢。う。

第四十七 狼と羊の話 (63)

或時狼の方より。羊の方へ使者以て。入る。口上。う。な。め。は。豆。小。影。離。散。
の。思。を。考。へ。し。畢。竟。市。辺。の。方。小。彼。大。と。奸。奴。の。あ。つ。て。我。小。昔。と。
吠。罵。り。ぬ。兎。用。逆。動。を。引。起。し。あ。り。預。く。を。彼。大。と。も。速。小。追。
の。け。り。ゆ。と。交。際。小。付。以。後。い。ま。も。放。障。お。く。永。久。は。邪。ま。い。め。
し。と。あ。つ。た。れ。だ。羊。を。何。の。業。も。付。た。狼。の。言。理。も。あ。つ。と。直。小。犬。を。追。出。せ。し。
そ。の。後。を。獲。る。もの。あ。つ。て。数。多。の。羊。一。疋。も。あ。ら。ぬ。皆。狼。小。食。う。と。ぞ。

第四十八 獅子へ奉公する狐の話 (64)

或狐。獅子。其。小。奉。公。ま。し。う。の。と。定。り。て。己。を。餌。食。と。め。獸。と。見。ぬ。ま。し。う。を。
勤。め。獅子。と。是。を。捕。ま。し。の。と。職。し。各。其。の。分。を。守。り。た。て。又。極。都。

軍ころし。後くやめても。私我慢の心をばし。吾だとしてあんでねん
方るものぞ。直ふ獸を捕る免科ををひ。或日獨て狩ふおしけるも。忽ち
獲師ふ見付られ。却て獲物ふせらるるも。さうぞ

白きのかを皆れ。かを守ることも身安うぞ。

第四十九 歳徳神と駱駝の活(65)

むう。駱駝頭ふ角を添はん。やと歳徳神つねも。他の獸やといと勇ま
活け。ある角あるふ。何とて吾やと天の恵のや。と怨づられ。神祇を
関をもぬのふ。あに却て。うもさ。とぬのや。と生耳を切緒のい。とぞ
余り多く得ん。とぬのふ。あに得。此少の相と。人係せ失ふ。あに

第五十 驢馬とちりくんの活(66)

驢馬ちりくんの唱を聞き。妙智あり。吾も如彼あやを捕たい
ものぞ。ちりくんの向ひ。汝も。ア何を食あう。と。んあ好智を
出。と聞き。と聞き。ちりくんの言。ナ。別ふ食物もあ。ませぬ。た。露
ちりくんの言。ちりくんの言。驢馬の言。を。も。露だ。と。後を露だ。と
嘗て。吾は。ちりくんの言。あ。く。飢。て。死。る。と。ぞ

他人ふ薬とあ。と。の。の。ふ。か。や。毒。と。あ。と。の。の。の。捕。て。人。の
ものを欲。人。の。の。を。羨。あ。と。思。ふ。い。の。に

第五十一 ヘルキヌ権現と車引の活(67)



或農夫馬車を引せ。泥濘る小路をゆく。車輪泥土の海
にめぐる。馬はうねり、人もうねり、そのとき男を推かさんと
骨も折る。只一心ふヘルキエ、権現を祈る。け、救済をすゝひた。あ、
助けを乞ふ。預ひられぬ。権現さまがふ見遇へぬ。忽ち天降
りて。汝は我のみを救むるもの。汝は先づ汝の肩を車ふ
うけ。身をとりて輪を一連ふ押す。天をよみつつ、助のうんと
力を盡すものを扶くるものと。教解のひかりをこゝろに
あ、何ふ信仰をせぬ。自のうゝ免めぬ。いのち。お佛に助け
のふ柳あ――

第九十二 免と蛙の話(70)

或頃免も四方より款をうけて。最早仕合の取直へり。かともかく。
自滅せしより外ありと知りいつ。二回し合せて水中へ身を
沈んと。池の方へ脱走たり。けいとも多の蛙の池の辺りふいて遊び
居るもの。そ免の群集を見て。あまをさうして水の中へ遊び
あむ。真先ふとんだ。免立止り。我友ニア侍なせ。我輩もさう。
そんふおひやう。あ、あ、あ。此免ふ吾人う。とつと。吾命の
奴のあもせ

他人の不意ふは。て。吾心を安んず。あ、但一素力をつ。

あんでも世の中を吾より勝る壽命のいのちのあつとあふい

第五十三 農夫と鶴の話(71)

或農夫が時つけたる田を啄荒と鶴を捕らんと思を仕つけた。夕方お
あつて往て見ゆ。多くの鶴ををわて。内お鶴のな一羽交り居
たり。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。
して汝の由時あつて。穀物を食と。ませぬ。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。
鶴のちで出せうま。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。
と。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。
ま。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。

「あうやと汝のつあををわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。
我のち捕とのだつら。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。
友悪るれ。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。お小鶴ををわてをわて。」

第五十四 釣師と小魚の話(72)

或釣師が小魚を釣て。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。
お獲あ。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。
あけたり。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。
さうお小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。
ま。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。お小魚ををわてをわて。

すて、又た多ふかゝるまゝに、とて。狗師^{つうし}首をうつて、あゝ吾を、と汝を
捕^{つま}へど、汝^{ては}を水の中へ返^{かへ}したあ。そ、肉^{にく}汝^をを。サア捕^{とら}て見^みサイナだらう
読^よみ多^{おほ}ふあるを。林^{はやし}の内の二羽^{ふたは}も、亮^{あき}ふと、云^いふや

第五十五 猿と駱駝らくだの話 (78)

[illegible]

おれ
いふ
不意もせぬづゝ。不業をなさりあはれ

第五十六 北りき獅子ししの活
(75)

或時毛虫けものあつまるゝ。春族けんぞうの多きとを濟争ふはかりあひあり。之を倫次りんじ牙はふ
斤しん付けくも。遂すい小獅子せうしととを多少たせうを比ひべんと。群獸ぐんぐ獅子しの洞窟どうくつ小本せうほん。先まづ
牝獅子めし小向こむかつて。汝なんぢを何なん子こを舉あげや。くくととむ。牝獅子めし目を怒いかりせ
脇わきを張はり。我われ中ちゆうを唯一えき足あしづもけ雄兒ゆうゐありありす。凡おのそ

質惡くして数量の多しより寧ろ少くても質の好しん方勝あり

第五十七
新の束の活
(76)

或倉父家兄才喧嘩して家眷の関牆ぬのを憂へ是と和睡させぬと。

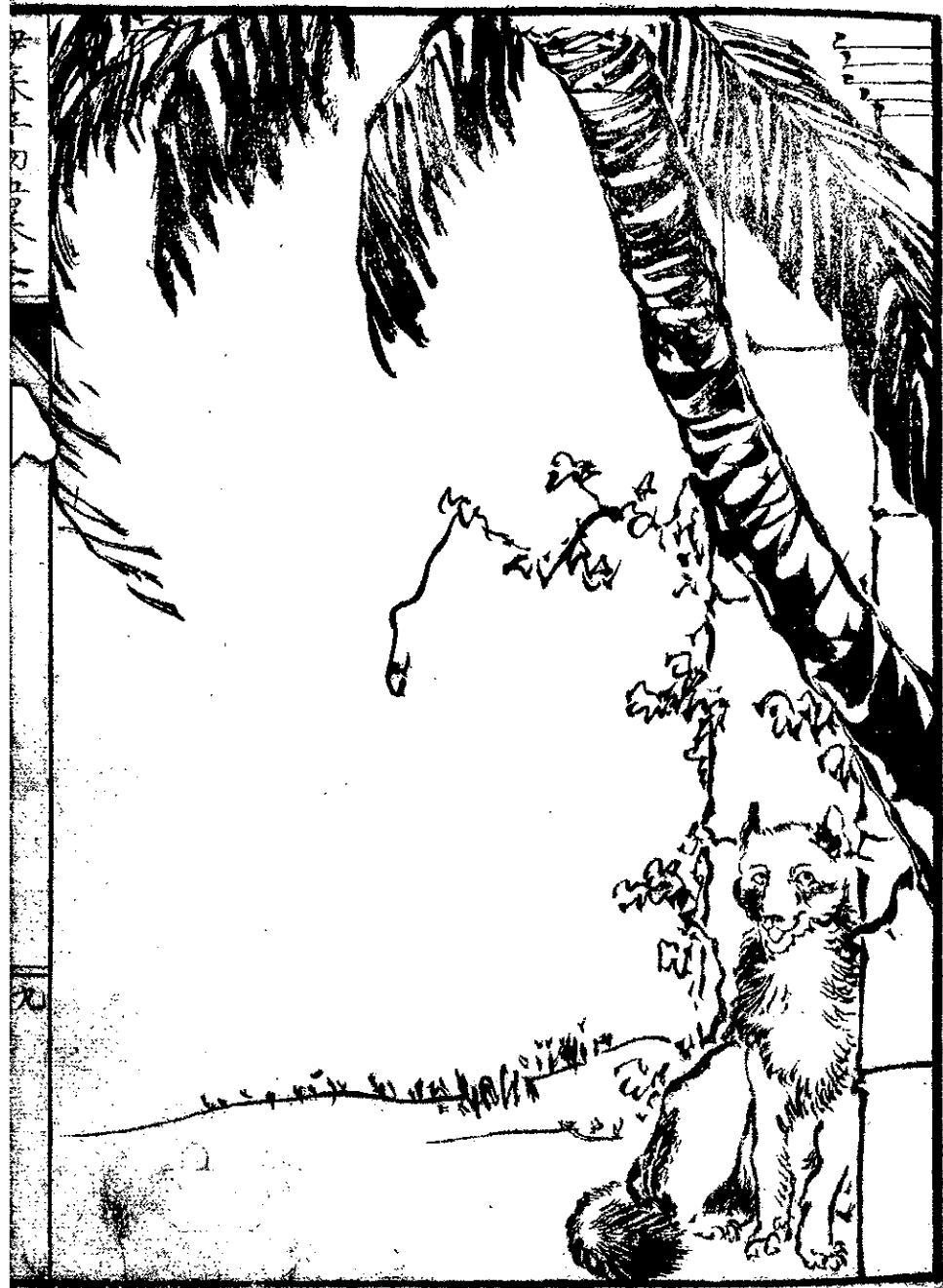
種くふ言葉と牽一たれど関入る。像を壁に設けて是を論じりて
工夫。或日家翁兄弟を呼寄せて。吾のあし難を一把持て来い。吾
た。や。そ。兄弟。弟と持来りたれ。堅く。と。を。束ね。び。像。を。お。れ。
お。付。た。う。つ。て。兄弟。代。り。ぐ。ふ。を。う。け。足。を。う。け。て。お。ん。と。た。れ。も。な。れ。
そ。あ。で。家。翁。束。を。解。て。各。く。一。本。づ。あ。て。づ。つ。て。サ。ア。を。お。き。て。云。付。
た。う。は。度。々。兄弟。易。く。是。を。お。得。た。う。の。ぞ。附。着。翁。兄。弟。あ。う。う。と。れ。ど
この。吾。兄。よ。汝。輩。中。より。合。解。して。居。内。を。力。の。強。く。仇。を。防。ぐ。ふ
充。分。あ。れ。と。と。分裂。ある。附。を。力。が。弱。つ。て。守。ら。ず。ぬ。ぞ。以。後。は。決。て
喧嘩。と。す。と。ふ。と。怒。り。戒。め。たり。と。も。と。ぞ。

同心合力を情をけり

第五十八 武夫と獅子の話(77)

或武夫獅子と連立て歩行をせり。是より力自慢をて。ヤ人間は強
ナ。獅子は強いに云。募る。わ。ふ。路。傍。に。勇。者。の。獅子。を。踏。て。か。石。像。の
ま。て。あ。る。の。を。見。て。武。夫。コ。ウ。是。より。汝。の。方。が。強。い。と。云。何。ぞ。お。お。け。の。あ。う。の。
獅子。夫。も。は。あ。の。像。の。云。方。に。や。と。我。輩。の。石。工。で。あ。つ。た。あ。う。人間。の。是。が。お。
一。疋。の。獅子。と。い。ふ。や。獅子。の。是。の。り。ふ。二十。人。の。人間。は。ら。う。
人。と。只。自。分。の。方。だ。と。う。り。都合。の。好。極。め。の。と。い。ふ。もの。に。や。

第五十九 乳母と狼の話(78)



付たり。その海豚をうけて。相公。汝を「アテ子」の海人にてあづかる。海豚。夫。やア汝を「エリース」を
方格。其地の有名。その人。きく。てあづかる。海豚。夫。やア汝を「エリース」を
お前知の等。や。猿早の。込めて「エリース」を豪富。商人の名。と心づ。
「エ。また私の最。とある。朋友のきく。てあづかる。と。海豚を猿の
説流。ふあ。と。きく。て。足下の。根。お説流。人を。きく。ても。隨意。ふあ。と。
が好。と。きく。て。彼の。底。お沈。と。きく。て。

知。と。きく。て。せよ。との。聖言。を守。び。是。の。聖言。利。口
あ。と。補

第六十一 大い噛まして狼の活 (81)

或狼。大い噛まして。大い噛まして。身動。を。きく。て。日。年。の
と。傍。を。通り。きく。て。きく。て。きく。て。水。を。持。て。貫。ひ
度。と。思。ひ。固。居。あ。と。きく。て。狼。と。足。下。の。水。を。持。て。きく。て
下。され。と。食物。を。きく。て。見。付。ま。し。と。きく。て。羊
中。く。油。割。せ。と。あ。と。きく。て。僕。が。水。を。持。て。きく。て
膝。前。へ。寄。り。きく。て。きく。て。食。物。を。出。ま。す。と。きく。て
平日。他。小。畏。憚。と。きく。て。困。と。思。ひ。果。然。と。きく。て。親。を
きく。て。実。ふ。と。きく。て。悪。人。と。思。ひ。油。割。の。あ。と。きく。て
の。で。油。割。と。きく。て。補

第六十二 燕と鶯の活 (86)

燕と鶯と出合い。イヤ、吾の好むや。ナニ吾の美をいやと云ひ争ひ。果あつての鶯大音をあげて。汝の羽儀のを夏の内計りて吾の好むを何事でも冬も越す。

耐久の好むを觀美の好むを益や

第六十二 燈火の活 (87)

大集會の附で油をふくんで光をわやと居る燈火満堂の中にあつて。ナント、日や月や星もどうも明るさうさうと大言を拂ふ。おのゝ風が琴くと吹て来て燈火忽ち滅びたり。附ふき人火奴で

明を點けあつて。コウ。光をあせ人燈公以来口をきくあきんか。エ。天の光を決して吹滅せやアーねむ。

前後するもふ余り大言を拂ふ。直に頭を壓られるもの

や補

第六十四 牧人と家牛の活 (88)

或牧人家牛を失つて。何處へ行けやと山や林を尋ねあけけども見あつて終ふ尋あぐんであんでも他小奪去きた小相違をかいと山の神や土地の神へ願をうけ。盗賊を見付らる。盗賊もたあら。此れ小羊一足献備やませう。南を大明神南を大明神と祈



あがらう。東又西へ巡歴するも。不圖ある山の背へあがり。獅子の
失と大牛の死骸を押して。殆喰ふんとするや。又と見ゆ。牧人
そを見て驚愕。南無大明神。南無大明神。は災難を逃れせしめ。
逃了るや。お來ま。たあ。必し。此れ。お彼牛を拜具せし。と云
り。と云。

神佛への預け。悉くは。因届け。ふあつて。ある。や。ま。の。の
自らの預け。で。困る。や。お來。だらう。

第六十五 橡櫛と蘆の話 (91)

或河堤。小生長たる。橡櫛。大風の。時。お根返り。し。い。を。流。せ。や。ら。ふ。

けふ。き。う。小。流。と。なる。蘆。を見て。き。と。め。何。お。お。う。小。細。く。軟。弱。の。
もの。お。小。流。と。ぬ。と。不。思。儀。あり。き。め。も。太。く。流。す。もの。堪。
え。り。と。似。や。う。と。い。ふ。や。を。蘆。通。り。ふ。間。と。や。て。な。根。を。驚。と。
ゆ。め。お。お。迎。と。ある。根。が。嵐。お。送。て。只。一。筋。お。曲。ま。と。せ。し。ま。し。ゆ。め。
吹。倒。れ。し。と。あり。き。と。輕。う。の。風。お。伏。つ。曲。つ。ぬ。い。ゆ。め。い。川。も。
を。驚。お。い。と。云。ら。る。

第六十六 水星明神と惣夫の話 (92)

赤貧の。き。あり。あり。一日。河。畔。あり。樹。を。伐。り。居。た。り。と。過。て。斧。を。水。
中。お。え。流。し。忽。ち。生。業。の。資。本。を。失。つ。て。歎。と。哀。し。む。や。り。限。あり。

正直なり益をなさずともいふは限あれ

第六十七 鶴と雁の話 (94)

或日鶴と雁と同一畑に降ると。餌をあさるに居る。忽ち狩人出
来たり。鶴も瘦て軽きゆゑ。是を見ると。故翼を以て。唯一途を
飛去る。雁も肥て重きゆゑ。急小逃去る。其の出来はついで
狩人不獲られし。

世の中變動も亦頃々。重きものより軽きものこそまゝあれ

第六十八 獅子と他の獸と狩ふやと活 (98)

獅子と他の獸と狩ふやと。肥る鹿一頭を獲たり。その時獅子自ら

行司と称し。是を三つに裂いて。極々くも。拙者獸長のものあれど。
官資として先ツツ取つ。其次を拙者狩ふ加うたるものあれど。
自身の分は。後として。三ツ取つ。第三分中。取つて。誰ふあれ
吾言を肯ふ。この是を引取。

威勢の盛なり。このゆゑ。拙者の振舞多きものと知れ (補)

第六十九 蚊と牛の活 (98)

牛の頭の廻りを。ぐんぐん。弄て居る。蚊は。角の上より。つと。止る。さ
まつび。は免あふ。い。私。が。中。で。迷。惑。あ。る。直。ふ。ま。ま。ま。せ。う。ど。う。ぞ
そ。う。あ。り。や。つ。て。下。れ。牛。何。ふ。汝。が。止。と。て。吾。の。頭。の。迷。惑。あ。る。と

いませぬ。イヤモウおかしな事だらう。もはしうあるらう。ものは勝るはず。
実情をいさうある。何故ふはははは。のだうも知れやう。いませぬ
心ふくれれ。考も亦ゆかい

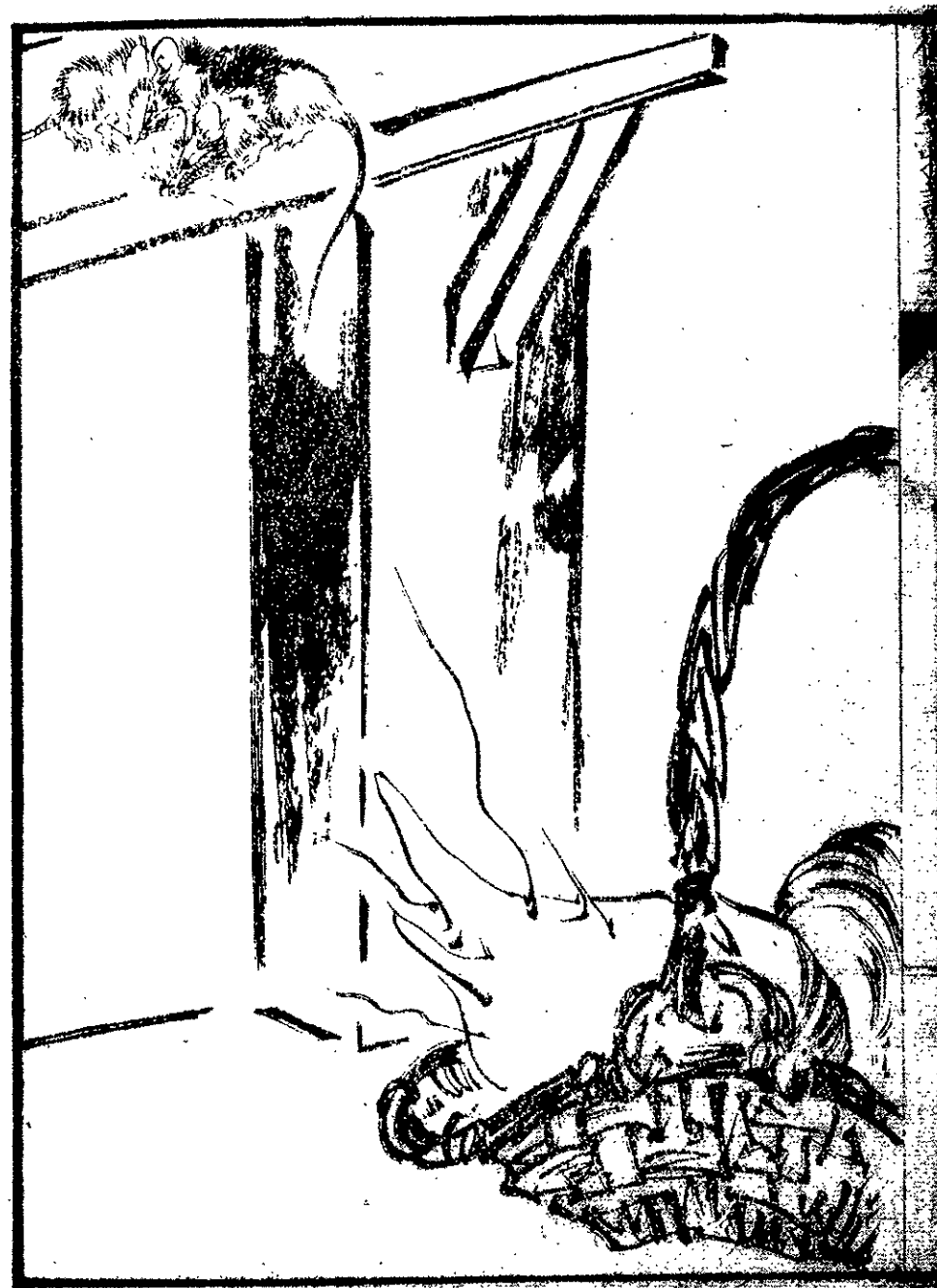
第七十 神佛天上ふ會合の活(99)

歳徳神海王権現才智菩薩。天上ふ會合せられ。各法力を以て。
能調了一物を製作さんとのり合をあり。と。めで歳徳神を人を
あーら。才智菩薩を家とあーら。海王権現を牛とあーら。と。
内ふ菩薩尊者あふ。の。い。ま。ご。ヲ。リ。ニ。ビ。エ。の。靈。山。より。來。會。は。多。き。ら。う。
ん。む。幸。い。尊。者。と。判。者。の。役。あ。て。誰。の。製。作。が。能。行。届。て。關。界。が。

あつ。い。ふ。の。を。定。め。せ。ん。と。待。た。れ。た。う。ふ。や。い。と。あ。く。尊。者。と。あ。れ。
る。と。い。ふ。と。い。ふ。と。裁。判。と。い。ふ。と。あ。る。と。あ。る。と。尊。者。は。い。れ。と。見。て。
笑。と。い。ふ。笑。ひ。老。牛。を。指。て。曰。け。角。と。教。と。突。く。内。ふ。目。の。見。え。ん。が。
た。め。ふ。眼。の。下。ふ。あ。つ。て。よ。う。次。ふ。人。を。さ。て。曰。心。の。邪。正。の。見。え。ぬ。と。
た。め。ふ。胸。の。あ。つ。う。小。窓。あ。つ。た。と。い。ふ。と。め。ど。次。ふ。又。家。と。い。ふ。と。風。候。乃。
悪。い。隣。家。を。避。ん。ぐ。た。め。ふ。あ。せ。車。を。付。き。う。や。ら。ぬ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
歳徳神の突然まで。尊者をいさう。い。ま。ご。と。曰。短。所。を。い。ふ。奴。と。使。
して。き。う。れ。や。ア。い。ぬ。と。自。分。で。一。番。好。物。を。持。と。よ。で。他。の。もの。の。
月。旦。を。打。ア。い。れ。

暴君の民を厭ふのみけし。如何ぞ遺種あるのみを欲せらむらんや

第七十二 盗人^{ぬすびと}と母の活
(101)



とあり十三世をくませぬ

老翁もねでつゝまをさせぬ。あんな年いふまにれど見つけの
付て来るものや

第七十四 獅子王と相談獸の話 (103)

獅子王羊を喰ひては我息を臭ふやと云ふ。羊答ては狼が来る
まはともいふ。獅子王馬鹿な奴やと云ては首を食切たり。次は又
狼を喰ひ我口の臭をぬ何やと問。狼答ては吾は佳音でぬやと云ふ。
つて獅子王また怒てけ溜洩ものやと云てすぬふひを裂たり。
そあてても我を喰ひ我息をぬんぬ臭ふやと云ては狐畏い居る

近頃目寒でぬやと云て。絶と鼻がぬませぬ

利口のものを危いともいふ何ともあぬものや

第七十五 一双の壺の話 (106)

或はみ一双の壺流し下る。まッを陶やしてまッを唐銅にあや。
唐銅はより好むをうけ。おい陶さん一寸は待た。同伴ふありませう。
成文々側へは寄アもあさい。私が保護てやるうと云ふ。まを殺す。
あう。それの私を一番の禁物でぬやうまは。汝が遠きつて
居てさうなれど。私を殺すでたりまは。まは。汝が近うても。
錚然ともあやんあやう。私を直に被滅て住まは

余の強いのく、おまゝとて、おまゝを居ぬのよ、おまゝのあが、おまゝ。
ろづも弱方が、おまゝ。

第七十六 醫者と病人の活 (107)

何庵とのつる庸醫、或病者をも預け、あつ。例の伎倆あれば治療。
届うびりて病人死たり。葬礼の日、おまゝ醫者親類ととも、おまゝ。
路きて醫者「ア、は佛、おまゝ酒を抄、養生を能あつたあ。そののみと
あつせぬのふと、おまゝ施主のそ人の勃然して、おまゝ程貴老の言葉、
「やぶ、おまゝとあつ、おまゝのそ、おまゝ益千万、おまゝあせ、おまゝ人、おまゝ。
そののそ、おまゝいあ、おまゝ。

好勘、おまゝと鬼角、おまゝ後期、おまゝの、おまゝ。

第七十七 衆龍商議の活 (108)

或頃、おまゝも、おまゝ猫、おまゝひ、おまゝ苦、おまゝけ、おまゝ害、おまゝの、おまゝ。
あ、おまゝ一、おまゝ衆龍、おまゝ會同、おまゝあ、おまゝて、おまゝ商議、おまゝも、おまゝめ、おまゝた、おまゝ。
席上、おまゝあ、おまゝて、おまゝ移、おまゝの、おまゝ秋、おまゝ果、おまゝも、おまゝ。
是、おまゝぞ、おまゝお、おまゝ謀、おまゝ計、おまゝも、おまゝあ、おまゝ。
小龍、おまゝを、おまゝ出、おまゝて、おまゝ諸、おまゝ色、おまゝふ、おまゝり、おまゝま、おまゝ。
畢竟、おまゝ彼の、おまゝを、おまゝ要、おまゝも、おまゝを、おまゝ知、おまゝら、おまゝて、おまゝ。
け、おまゝ後、おまゝを、おまゝ彼、おまゝ猫、おまゝの、おまゝ項、おまゝ領、おまゝを、おまゝけ、おまゝ置、おまゝむ、おまゝ。
け、おまゝ後、おまゝを、おまゝ彼、おまゝ猫、おまゝの、おまゝ項、おまゝ領、おまゝを、おまゝけ、おまゝ置、おまゝむ、おまゝ。

智恵易くして我逃さずの逢うと。花塔は保を以て感伏し。
 異口同音の可然とぞ因り。その時候は黙然として扣き。
 老鼠のくさる。中事をもつと見度して。お静まりまゝ。花
 び策極めてぬあ。其功効も亦著明。但。茲より度
 一。つある。花塔の猫の領に鈴を付し。あ。や

議論ぎろんと議論ぎろん実地じちと実地じちあり

第七十八 獅子と野羊ヤギの話 (109)

三伏さんぷくの夏なつの暑あつさ小堪こかんうひて。生靈せいりやうのあやみ喘あへぐ傾かたむけ水の湧も出でる交まじつ
獅子ししと野羊やぎと同対どうたいに水みづを飲のみふ來きて。イヤ吾われの先さきは汝なんぢの後あとにや

と相面あひまへハハつひつもの。果もを噬か合あの掴つかと合あハ。死しもとも負まひト瘡かさトト。挑おこと争あそひ居ゐたり。余あまり小息こいき切れ堪た難がたとゆゑ。猪ぶた角かく双方そうほう相あひつて。頭あたまと見みとけられど。一いっ群ぐんの鷗う翼よくととりて。孰なんどでも死えぶ。方かうを解とふ。志しまはさうと。飲あひ毒どくとて居ゐるゆゑ。獅子ししも野羊やぎも始はて急いそぐつと。行いや西さい京けい鷗うや鴨鴨の餌えふあらうより。是こうと申まをす。直ちか小宮こみや藤ふじとやみたりとぞ。

外寇を内憂を鎮むるの一助ありとぞ

第七十九 鶯あぐさ黄金ごうごんの卵たまごと彦うお話 (110)

或人あるひと鷲しうを飼かひふ。日ひ々黄金こがねの卵たまご一いっツを産うめり。主人しゅじん是こをよろこぶ。

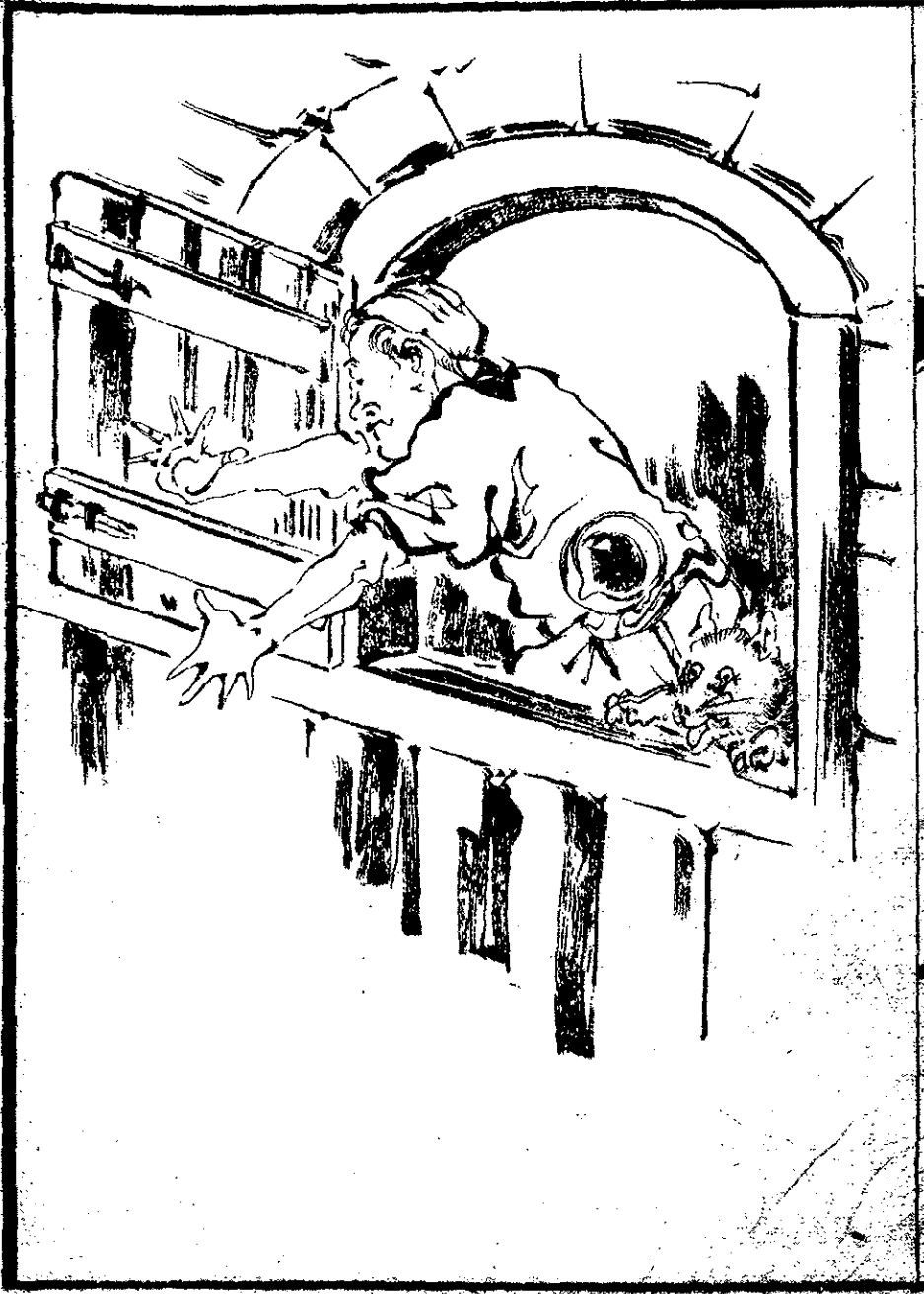
うふふふ。雖すれどや。日ひふつて。益えきの貸方かた甚お達たつ。ゆふに
一度いちど小室こむろを招まねはんやと。やうてあひるを志しあらう。て腰こしの
うちをせん。さうさうさうさう。舞まのあひる。ふいふあひる。

日ひふつて。の招まねあらう。ねえみあん。余あのあうさうを
さうし本銀ほんぎんさうも失うしなふものぞ。

第八十 餐ちん養よう招まねひて大の活(113)

或あるは家餐けいちん養ようを設おこし友人ゆうじんを招まねき。友人ゆうじんの飼犬かいかん主あどの後あと小尾こびを
同どうく。家小入けいせうにり来きせり。さうさう。王家わうかの飼犬かいかんも我主われあどの服ふく。

さう。友大ともおほを出迎でしむかへ。あれをさう。ゆふあひれ。と。焼いんをゆいんめ。ふ
山海さんかいを食たせ。と。さう。客方きやくかたの大謝辞たいしゃじを。餐養ちんようの用意よういが
あふのを見て。イヤア盛さかん。料理ちりど。あれを好財候こうさいこうふ。さう。た
饅頭まんとうと洋やう醬じやうさう。と。飲多量食置いんたじやうしきおきを。さう。さう。あふ
食物じきぶつが。あふ。さう。い。さう。と。猫言ねこごを。い。あう。焼いん。さう。い。あ
尾びを。揮う。と。揮う。と。尾びの料理人ちりじんの目めふ。さう。料理人ちりじん。イヤア。あれを
何なんの。大だ。と。さう。と。果はて。川摺かわすり。窓まどの外そと。授さづ。さう。と。さう。さう。
大の敷止ふしどめ。夜裏よるア。コウ。さん。佳味ちみを。食たひ。さう。と。さう。さう。授さづ。
出だされ。と。大痛おほいたさ。と。あう。冷笑れいせうひ。と。あう。私わたしを。さう。と。さう。と。さう。



他の尾ふ附てきりきり窓のうしろに寄れり憂のあり

九

(115)

むう。或池小群蛙をみて。何ぞのゆゑや。のふ心す。のせありけるふ。
 豆ふ我慢の振舞まをりて。終ふ語りやうあるれど。ある日蛙ふ
 お集り。天を仰て。諸苦ふ我輩を統濟ゆづとよと主人をもたしめし。
 預い訴下たり。天神是を聞き。益もあさう。あうと笑つて。只一本の
 丸柱を天上より投下し。ふ。水を打ち。波を揚げ。青いときほし。

うろくぐれど。とまでお寄つて居た。蛙も、おのゝきで水をつぎやして
皆泥の中へ潜りかかれ。まづうろく虫もゆがう。いづのやぶで先のけの
蛙ありて。水の面へ首をさし出。げの振を伺ひ。ふ枝の落たるなり
ぐれど。うろく虫主人の度量を試んと。指を付くと。他の蛙共
遙に見て。我もくしく浮き出。枝の例ふ伺候せり。されども固より無心の
木あれど。蛙は、まず小恐懼を忘れ果ると主人へ跳たり。押侮ふいたる
たり。その時蛙をかく主人のおとあ。くく。て素力のあることと。
不足のうろく虫。再び天をお仰て。何卒他の勢ある主人を授け給は
と。初め訴へた。天神を聞ひ。怒を収束し。秋の草に。二羽の鷹を

送^{おく}らふ。その譬^{たとひ}下界^{げがい}の降^{くだ}るも否^{いな}や。亦^{また}小蛙^{せうわ}を驚^{おど}り初^{はじ}て。以^{もつ}來^{きた}ふ
餌^えとあ^をりたれど。蛙^わどもを驚^{おど}りたれ。天^{てん}を仰^{あが}て。打歌^{うちうた}を。あふとそ
憐^{あはれ}をたれ。救^{すく}ひと。と大^{だい}にあげて。水神^{すいじん}を以^{もつ}て。詫^わまれ。天神^{てんじん}を
問^とひ。ぬき汝^{なんぢ}の天罰^{てんばつ}を。刻^{すま}む叔^おの得^えあり。我^{われ}もむけ。後^{こう}を折^{をり}合^あて
豆^{まめ}の中^{うち}より。世^よを送^{おく}り。決^{きつ}て天^{てん}の賦與^{ふい}を。不足^{ふそく}として。益^{やく}もあふ。ものを
預^{あづか}ふ。と。然^{しか}る。戒^{かい}めり。ひ。とぞ。

第八十二 羆馬ろばと主人の活 (118)

或驢馬最初百疋飼ふ。秣少く且骨が折て勤づゝと思ひ。歳徳権現へ願ふところにて。どうぞけ辛苦を救ひ。又他家へ移す。

因て驢馬を以前より重載をりて。骨が折れて死しなれど。
 そをぞすに控現かんげんの願がんをうけて。おふとぞけ難なん後ごを救すくいぬ。たをけ
 りて。新あらた々々と。控現かんげんすも。怒いかりりひ。と度どを華は座ざへ送おくるもふ。
 やく驢馬ろばを主まづ。ととる度ど毎まいふ。既いに造つく化けの悪わるく。骨ほねの折おき
 う。ともう。ととる。或日主人の侍しりて。居ゐるのを見て。歎息たんそくして
 や。我われア。吾われを運うんの目め。いものをおど。以前の旦那だんな（奉公ほうこうたの一番いっぺん
 ようらだつ。已おほに。尚なう時じ動どうて居ゐる旦那だんなを。生うて居ゐる内残うちざん酷くつき。と
 ーや。けり。ーや。ぬ。死しん。後ごも免ゆるさう。ーや。里りヤア。ーかい

一歩ふ安んずるのを知ぬものぞ。生涯心落つべし。
他所へ移る度毎ふ不運ふあるものやぞ。